

# 遺伝子問題とはなにか

青野 由利著

生物がもつ遺伝子のセット、生命の設計図ともいえる「ゲノム」という語が、それほど違和感なく聞けるようになったのはいつからだろう。十年ほど前、国際協力によるヒトゲノム解読計画が動き出したころは、「ゲノム」の説明をするのに苦労したことを思い出す。その後も事情はあまり変わらなかった。

## 人間を問い直す好奇心と探求心

情報が解読される、ゴールは近い——と言われてからだろう。今ではゲノムや遺伝子は二十一世紀の科学・技術を語る際に欠かせないキーワードになっており、遺伝子技術はIT（情報技術）とともに基幹産業を育てるとの期待もある。今年からは政府のミレニアム計画も始まった。ヒトゲノム解読計画の立ち

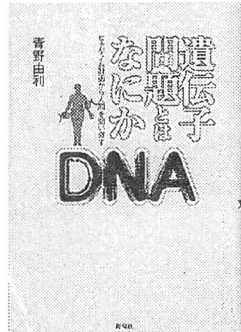
は生命）のある意味では最もデリケートな部分に触れる技術はまた、さまざまな「問題」を抱えている。本書で語られている遺伝子診断や遺伝子治療などは、「どこまでが許されるのか」といった倫理問題を我々に突き付ける。そうしたことを常に考えることも、ゲノム時代に必要なことだ。

著者は記者の好奇心と研究者の探求心を併せ持つ

いろんな人がそれを口にするようになったのは、一年ほど前からだ。昨年十二月に人の二十二番染色体の全塩基配列が決定され、今年に入つて二十一番染色体もこれに続いた。二〇〇三年には人のすべての遺伝子

上げに苦労した人たちは、こうした時代の変化に苦笑いをしているに違いない。確かにこれからのバイオ産業や医療は、ゲノム情報によって大きく変わるだろう。

いる。その彼女が取材し、書きためたことをまとめたものだ。ヒトゲノムの解読から始まって、病気や体質の遺伝子、心の遺伝子、クロソンのことなどが広く取り上げている。



あおの・ゆり 57年東京生まれ。東大薬学部卒。現在毎日新聞科学環境部の編集委員。著書に『ノーベル賞科学者のアタマの中』など。

しかし、遺伝子という人（あるいは子）にかかわる人の心理学など独特の視点からのことも書かれている。読み進むとともに、遺伝子は実に奥の深いものであり、副題にあるように「人間を問い直す」手がかりになると思う。（新曜社・二、二〇〇円）

編集委員 中村雅美